既婚女性の性役割意識に関するPAC分析[1)]

――子どもが生まれることによる変化について――

内藤哲雄[2)]・金　娟鏡[3)]

PAC Analysis of Marital Women's Gender Attitudes: The Transition to Motherhood

Tetsuo Naito (Shinshu University)
Yeonkyeong Kim (The United Graduate School Of Education Tokyo Gakugei University)

問　題

性役割意識[4)]の差異に関する研究では，男女の性別による相違（伊藤，2000），年代による差（稲毛，1996），学歴による違い（鈴木，1999），就業による違い（関井・斧出・松田・山根，1991）などが検討されてきている。これらの研究を総括すると，男性より女性のほうが，年代が若くなるにつれ，さらに高学歴者・就業者であるほど，「男は仕事，女は家庭」といった伝統的な性役割意識が弱まる結果となっている。

ところで，年代が若くなるにつれ伝統的な性役割意識が弱まりつつあるといっても，依然として現実に家事・子育ての大部分を担っているのは女性であり，意識と実態には大きなズレ（大和，1995）がある。また，成人期における性役割を考える際には，結婚・出産といったライフイベントによる変化を看過できない。夫婦だけのときと，子どもが生まれて親になったときとでは，夫と妻の役割は当然異なってくる（笹田，2001）。岡本（1992）は，家族を1つの有機体のシステムとして捉え，その発達段階を6段階に分割している。第1段階は新婚期，第2段階は出産・育児期，第3段階は子どもが学童の時期，第4段階は子どもが10代の時期，第5段階は子どもが巣立つ時期，第6段階は加齢と配偶者の死の時期である。こうした発達段階の進展に応じて，対関係にある夫と妻のそれぞれの役割は，相互に影響を及ぼしながら変化していくとされている。しかしながら，Bonnie（2001）が指摘しているように，これまでの研究では家族発達段階の移行による性役割意識そのものの変化を捉えよう

1) 本研究は，第一筆者内藤が研究計画の総括に関わり，第二筆者金が研究の実施を行った。本研究の実施にあたり，高橋道子先生（東京学芸大学），笹久保新吉様（稲城市立第二公民館）にご協力をいただいた。ここに深く感謝いたします。また，面接に参加してくださった皆様に感謝申し上げます。

2) 信州大学　人文学部
3) 東京学芸大学大学院　連合学校教育学研究科

4) 鈴木（1999）は，性役割意識を性役割態度とほぼ等価なものとして使用している。本研究でも，性役割意識と性役割態度を同様の概念として扱う。

とする視点が欠落してきたといえよう。そこで，家族発達段階の移行による性役割意識の変化に関する研究を推進することが求められる。とくに，夫婦の二者関係から子どもを含めた三者関係に変わり，夫婦役割に親役割が加わることで性役割意識に大きな変化が生じる，第1段階の新婚期から第2段階の出産・育児期への移行による変化を取りあげることが不可欠であるといえよう。

さて，性役割意識に関する従来の研究では，属性等による差違を明らかにしその信頼性を高めるべく，多標本による群間の比較に努めてきた。しかしながら，集団による平均値的データによって分析するならば，個人独自の特性のかなりの部分が残差成分として削除されることになる（内藤，1997)。このため従来の研究では，意識の形成や変化に作用する要因や意識の構造の平均像をある程度解明したものの，多様な生活経験や価値観を持った男女が結婚・出産することで，それぞれの性役割意識が相互にどのような影響を及ぼし，ダイナミックに変化していくのかのプロセスを明らかにしたとは言い難い。少なくとも個々の家庭内における現実の性役割分担や役割意識は，家族の他成員との日常的相互作用の中で形成され，その意識の変化は個々の経験に基づいて意味づけられる行為としてのダイナミックスなプロセス（やまだ，2001）である。そこで家族発達段階の移行による性役割分担や意識の変容過程に直接アプローチするためには，従来の平均値的な量的研究ではなく個別的な質的研究が必要となる。ところが，質的研究法の代表とされるインタビューなどの技法では，解釈段階で研究者の個人的テクニックに頼りがちであり，研究者の主観に左右されやすいという難点がある（内藤，1995)。Steinar（1996）も従来の質的技法の恣意性を問題とし，分析の要件として次の5段階を提案している。それらは，1）要約：インタビューイーが表現する意味を簡略化し，簡潔に記述すること，2）分類：インタビューの内容をカテゴリーにコード化し，現象生起の有無を＋－のように単純に分類，もしくは7ポイントの得点に変換し，統計的に分析できるようにすること，3）ナラティブ構造：ナラティブ（語り，物語）が構成する社会的意味構造，またインタビューイーが構成するその時点での意味構造を明らかにすること，4）解釈：ナラティブで明らかになった意味構造を超え，より深く理論的な解釈をすること，5）折衷的なアプローチ：フローチャート作成などにより一般化すること，である。このSteinarの5つの要件に適合するのが内藤によって開発されたPAC分析である（1993，1997，2002)。これは，1）当該テーマに関する自由連想，2）連想項目間の類似度評定，3）類似度距離行列によるクラスター分析，4）当人によるクラスター構造の解釈を通して，操作的・客観的に個人別に態度構造を分析する技法である。ここでは，調査対象者自身の回答に基づいて析出されたクラスター構造というデータを媒介にして，対象者の現象世界を間主観的に了解する「現象学的データ解釈技法」が採用されており，Steinarが指摘する解釈の恣意性の問題を解消する。また，少数事例であっても，対象者個人のスキーマの全体構造を捉え，類型化することが可能である。

以上のような背景をもとに，本研究では，子どもを持つ既婚女性を対象として，家族ライフサイクルの第1段階から第2段階への移行により，どのような要因やメカニズムによって性役割意識が変容していくのかのプロセスを個人別に構造分析（PAC分析）し，各事例を比較検討することを目的とした。

方　法

被検者　被検者は，いずれも末子に未就学児の子どもを持つ家族発達第2段階の既婚女性で，30代前半の女性2人と40代前半の女性1人の合計3人である。30代前半の2人は，東京都内の公民館で開かれる「子育て講座」の参加者であり，開講中に研究の趣旨を説明し，協力を得た。残りの1人は第2筆者金の知人を通じて依頼し，協力を得た。

手続き　面接はいずれも金が担当し，すべて被検者の自宅で，2回に分割して行われた。1回目と2回目の間隔は1週間以内とした。とくに1回目は，被検者が率直に自分の気持ちを語ることができるように，日常会話から開始することでラポールを形成した。被検者には，まず，調査者金が未婚で，子育ての経験がないこと，自分の知らない世界であることを伝えた。ついで，プライバシーを侵害しない範囲で，結婚までの経緯を聴取した後，PAC分析を開始した。まず，連想刺激として，以下のような刺激文を印刷し，文章を提示するとともに，口頭で読み上げた。

「あなた自身が感じている男女の役割の違いについてお聞きします。あなたにとって，子どもが生まれても変わらないと感じているところ，子どもが生まれてから変わったと感じているところはどんなことでしょうか。イメージしてみてください。家庭の中で男女の役割の違いを感じたとしたら，子どもが生まれる前と生まれてからは，どんなところがどんな風に違いましたか。そして，どんな気持ちが生じましたか。また，何が男女の役割の違いをもたらしていると感じますか。あなた自身は，男女の役割についてどのようなものであってほしいと期待していますか。」

ついで，用意したカード（縦3cm，横9cm）に，連想が頭に浮かんだ順に記入させた。このあと，重要だと感じられた順にカードを並べ換えさせて，番号を記入させた。次に，項目間の類似度距離行列を作成するために，ランダムにすべての対を選びながら，直感的なイメージの上で，どの程度類似しているのか，その近さを「非常に近い」1～「非常に遠い」7までの7段階尺度で回答させた。第2回目の面接までに，作成された類似度距離行列に基づき，被検者別にウォード法でクラスター分析を行った。ついで析出されたデンドログラムの余白部分に連想項目を記入した。第2回目の面接では，余白に連想項目が記入された上記のデンドログラムを2枚用意し，被検者に1枚を渡し，もう1枚は検査者がみながら，デンドログラムの結果について被検者のイメージを聞いた。具体的には，まず，検査者がまとまりをもつクラスターとして解釈できそうな群ごとに各項目を読み上げ，併合された各クラスターから連想されるイメージや，全体が意味する内容の解釈，併合された理由として感じられるものについて質問した。各群が終了したあと，第1群と第2群，第2群と第3群のように，群間を比較させてイメージや解釈の異同を聞いた。続いて，デンドログラム全体のイメージや解釈について報告させた。これらの作業に続いて，各連想項目単独のイメージがプラス，マイナス，どちらともいえない（0）のいずれに該当するかを回答させた。最後に，調査者にとって解釈しにくい個々の項目を取り上げ，そのイメージを補足的に質問した。なお，

PAC 分析での聴取内容は，被検者の許可を得て録音した。

結果と考察

被検者Ａの事例

被検者Ａは，30代前半の専業主婦である。大学卒業後は就職。結婚と同時に退社。現在は８歳（女）と４歳（男）の子どもと夫との４人暮らしである。クラスター分析の結果はFig.1のようになった。連想項目の中で，重要順位の高い順にほぼ1/3となる４項目を取りあげると，1）責任感，2）人間としての強さ，3）子どもは母親に頼り，母親はダンナ様に頼る，4）自分が自分である気持ち，となる。これらは，自分らしさを求めつつも，母親役割を自覚し受容していることを示す内容である。重要項目のイメージはすべてプラスであり，また全12項目の単独イメージをみるとプラスが９項目，マイナスが１項目，０が２項目であることから，現在の役割分担を肯定的に受容していることが窺える。

被検者Ａによるクラスターの解釈

クラスター１は「責任感」～「生まれる前は気楽，不規則，夜遊び」までの９項目：すごい...，うーん...，極端というか，生まれる前と生まれた後だと違う。気持ち的に。それが子どもが生まれて育てていかなきゃいけないという責任感だったりするんだけど。でも，日本ってけっこう，女の人が家にいて，子どもを育てて，家の仕事をしてという風習というか，雰囲気，そういうのがあって，そうすると何か，子どもが生まれたら，何か，いきなり母親になっちゃって，今までこう遊んでた自分というのがなくなっちゃうような...。マニキュア塗ってとか，おしゃれしてた部分ってあるんじゃない？　今まで。そういうのがなくなっちゃって，一人の母親。でも，母親像というのが昔からの母親像に縛られているというかなぁー。そういうのが何かあって，私はそれが嫌だったのね。自分は今までの自分でいたいから，何かいきなり母親になったからって昔からある母親像にはめられるのは，あれなんだけ

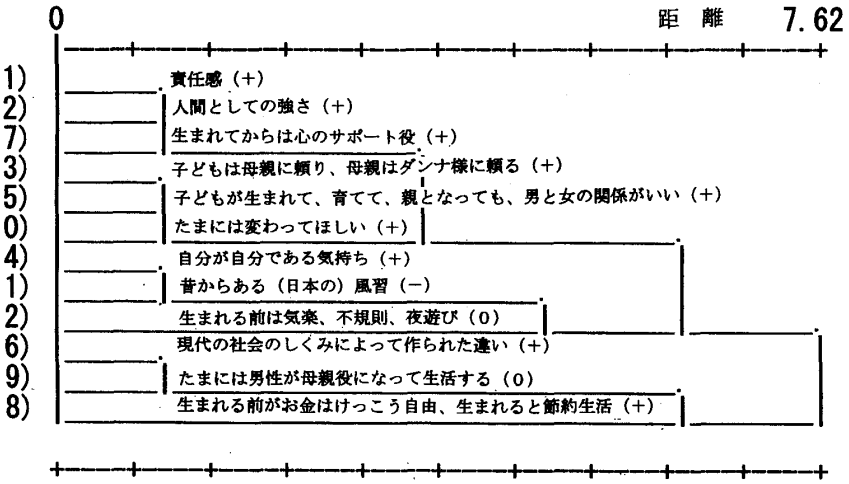

Fig. 1. 被検者Ａのデンドログラム.
1） 左の数値は重要順位
2） 各項目の後ろの（　）内の符号は単独でのイメージ

どと思って。でもね，子どもを育てるのはすっごいたいへんというか，強くならないと親がザワザワとかしたら子どものほうが，ね，ついてこれないというか。だからすっごい，母親ってすごく強くならないと（いけないと）思うね。強くなっていく（↑）[5]とふっと頼るところがほしくなって，それがダンナ様だと思うんだよね。やっぱり一日中子どもと接していると，気ばっかり張ってちゃうところが多いから，ダンナ様に頼っちゃうし，自分が自分でいられるのもダンナさんと一緒のときだと思うし。うーん。そんな感じかなぁー。

クラスター2は「現代の社会のしくみによって作られた違い」～「生まれる前がお金はけっこう自由，生まれると節約生活」までの3項目：これはやっぱりほんとにそうだよね。女の人も男の人と同じように働けるような雰囲気ができているから，けっこう二人で働いていれば，子どもがいなくて，そうすればお金を自由に使えるし...。何か生まれちゃうと今の社会って女の人が働くのがすごい難しかったりするよね。保育園が一杯だったり，あとパートも子どもがいると雇ってくれなかったりするから。何かさ，働き口があるといってもさー，私立なら保育園のお月謝も高いし，（仕事先から子どもが）“風邪とかで休まれちゃうと困るよね”といわれると，じゃあ，その風邪で休むときはダンナさんが休んでって思うんじゃない（笑）。絶対まだまだ女の人は縛られているというかさぁー。全然，縛られていると思うよ。そうするとしょうがなく，節約生活に入っていかなきゃいけないんじゃん。しかも，今の社会はなんだろう，“働け，働け”って感じで，ねぇー，やっぱりあれだよね。男性がこう産休とか育児休暇とか，そういうの取りづらかったりするしね。やっぱりたまには男の人が家でお母さん役をやって，という生活をするともっとこう違う，何だろう，社会に影響を与えるんじゃないかって。うーん。（クラスター2のイメージについて）一言でいうとなんだろうなぁー？　うーんとね，やっぱ今の社会に対する不満かなぁ。どう考えたって子どもを産んで育てていけるような社会...，うーんと，育てづらいよね。産みづらい，育てづらい。そういう不満かなぁ。

クラスター1とクラスター2の比較：下のこと（クラスター2）はあるから，結局風習から抜け出せないし，そういうことがあるから，人間として何というんだろう，節約していこうっていうところのつもりにもなるしー。うーん。“関わってはくるんだろうなぁ”という感じだよね。

全体のイメージについて：すごいっー。私ってけっこうちゃんと考えてたんじゃん（笑）。もっともっとうーん，自分が何だろう，ああやって字にして，こうやってみるとけっこう母親っていうか，一人の大人としてちゃんと考えているんじゃんみたいなぁ。すごいねー。

補足質問

「子どもは母親に頼り，母親はダンナ様に頼る」：すごく弱くなっているとき，もうほんと母親とか辞めたいって思っているから...。一人の人間として（ダンナ様に頼るん）だよね。

「たまには変わってほしい」：うちはねー。すごいやってくれるよね。やってくれるんだけど，何というんだろう，それがやってあげているみたいなイメージなんだよね（笑）。それがこうなんというの，もっと普通になってみたいなぁー。今日はすごいいっぱい遊んであ

[5] 非言語的反応については，次のように記録した。（うーん）ため息や応答，（↑）：微妙な抑揚の上がり，（…）短い沈黙，（笑）笑い。

げたんだみたいな（笑），それを私の役と代わってやっているイメージじゃなくて。さりげなくご飯を作ってて，私がこっちでテレビをみててというのがあってもいいかなぁ。やってあげているよという気持ちが強いんだよね。いつも私がやっていることじゃんと思うんだけど。（子どもが）生まれてすぐは“やって，やって”って（私のほうが）言ったけど，今はけっこうあのー，あまり言わないかなぁー。

「自分が自分である気持ち」：子どもが生まれると母親になったり，奥さんになったりするんだけど，そうじゃなくて，ほんとの自分自身をもう持ってたいという感じかなぁ。だから子どもに時間を取られて，うーんとバサバサしている女性にはなりたくないんだね。だから，子どもに時間が取られちゃって，例えば自分の寝る時間をさー，一時間冴えてマニキュアを塗ったりさー，どうしても指にビーズがつけたいとか，やってみたいとか，どうしても眉毛を切っておきたいとか，そういうなんかねー，それがこう自分みたいなぁ，やっぱ気持ち的にもあるかなぁー。あとこうお母さんって，周りがけっこう“お母さんなのに何でそんな服装を”とか，“お母さんになったのに，あなたはお母さんっぽくない服装ね”みたいなぁ，って言われたことあるよね。うちの実の母親からも“あなた，母親になってもなんでそんな格好しているの”みたいなぁ。どういうイメージを私にぶつけてくるのかが私にはわからないから，そういうの，やっぱり嫌だよね。自分は自分って思うから。日本だけなのかもしれないけど，お母さんっぽい格好みたいなのがあって。他の母親からも言われるのよ。“Aさん，どうしたの，若作りしちゃって”って言われるよ。でも，それってさー，その人にとっての母親の基準であってさ，私の基準ではないからさー。

「たまには男性が母親役になって生活する」：子どもは二人の子どもだから，まぁ一緒にやっていいと思うよね。だけど，家事とかになるとどうなんだろう，（夫が）外で働いているのと同じように，私は家事を自分に与えられた仕事だと思うから。掃除とかー，洗濯とかー，家事だよね，そういう一般のことはうーん，えーと，外に出て働くとその見返りとしてお金がもらえるわけじゃない？　私にはそういう見返りはないんだけど，でも，そういうふうにやることによって，ダンナさんが気持ちよく帰ってこれたりとか，子どもたちがこうご飯を食べて，“おいしい”っていってくれるところで見返りみたいのをさー。そういうのって男の人はわからないんじゃない？　そういう気持ちを味わうことができないと思うしさー，それはそれで別にいいんだけど，母親役になるということがさー，一緒にいてもたぶんないんだよね。父親としての，子どもも対父親なんだからさー，子どもが父親に何を求めているのかわからないけど，こう遊んでほしいとかそういうのがあると思うけど，もっとなんかこうーん，母親的な役，寝かしてあげたりとか，洋服を着替えたりとかもやってみてってそんな感じかなぁ。

被検者Aについての総合的解釈

クラスター1：子どもが生まれ，母親になったことで，「生まれてからは心のサポート役」として「責任感」と同時に「人間としての強さ」を自覚している。「子どもは母親に頼り，母親はダンナ様に頼る」ことを実感し，母親を辞めたいと気弱になったときには夫に頼る。そして夫に対しては，「子どもが生まれて，育てて，親となっても，男と女の関係がいい」と思い，母親役を「たまには変わって（代わって）ほしい」と感じている。マニキュアをつ

けたりするなど，一人の女性として自分なりのおしゃれを楽しみたい，女性としての自分「自分が自分である気持ち」を失いたくないと感じているが，周りの人や実の母親からは，母親らしい装いをするように言われる。「生まれる前は気楽，不規則，夜遊び」なのに，子どもが生まれてからは母親らしく生きることが求められ，唯一のマイナスイメージである抗いがたい「昔からある（日本の）風習」による拘束を感じている。日々の母親役割に伴う責任感や制約は，夫に頼る妻としての自分，一人の女性としての自分に移行することによって軽減される。クラスター1は<母親役割の自覚と夫の支え>であると解釈できよう。

クラスター2：女性であっても働くことが大勢であるにもかかわらず，子育ての責任が母親に偏在し，母親は働きにくく夫の稼ぎに頼る実態に，「生まれる前がお金はけっこう自由，生まれると節約生活」を余儀なくされる。性役割分業を「現代の社会のしくみによって作られた違い」がもたらしていると認知し，「たまには男性が母親役になって生活する」ようにと不満を感じている。そこで，クラスター2は<社会的仕組が生み出す母親役割と制約>と呼ぶことができよう。

全体について：被検者Aは，夫に対してたまには性役割分担を代わってほしいと感じているが，母親としての責任感を自覚することで，家族における夫婦の役割の補完性を維持する「対等で不公平でない分業」（山口，1995）として受け容れている。このことは，「自分にとって見返りはないんだけど，でも，そういうふうにやることによって，ダンナさんが気持ちよく帰ってこれたりとか，子どもたちがこうご飯を食べて，“おいしい”っていってくれるところで見返りみたいのをさー。そういうのって男の人はわからないんじゃない？　そういう気持ちを味わうことができないと思うしさー」との内省から窺えるように，被検者Aにとっては，家庭内の妻・母親役割が女性特有の愛情行動に支えられていると感じられている。<社会的仕組が生み出す母親役割と制約>への不満と，<母親役割の自覚と夫の支え>を結節するのが，第1クラスターの「生まれる前は気楽，不規則，夜遊び」と第2クラスターの「生まれる前がお金はけっこう自由，生まれると節約生活」であり，母親になったことによる制約や不満を夫や子どもの満足という見返りによって感受していると考えられる。大和（1995）は，性役割意識には性によって役割を振り分けるという論理ではなく，女性による家事・子育て＝愛情という，一見性別とは無関係の原則が働いていることを明らかにしている。被検者Aの事例は，伝統的性役割の受容や遂行が，家事・子育ての遂行は女性にしかできない愛情の印として解釈され，夫や子どもの満足といった心理的報酬によって維持・強化されることを示す典型であるといえよう。

被検者Bの事例

被検者Bは32歳の専業主婦である。短大卒後に就職。退社してから結婚。現在は3歳（男）と1歳9ヶ月（女）の子どもと夫との4人暮らしである。クラスター分析の結果はFig.2のようになった。連想項目の中で，重要順位の高い順にほぼ1/3となる4項目を取りあげると，1）自分が自分で強くなること，2）女である前に母親であるということ，3）私が感じていることを相手が感じているかどうか，4）信頼関係，5）求めはじめてもきりがない，となる。これらは母親役割の受容と夫への期待に関する内容である。各項目の単独イメージをみると，重要項目ではプラスが3項目，マイナスが2項目であり，全15項目をみると，プ

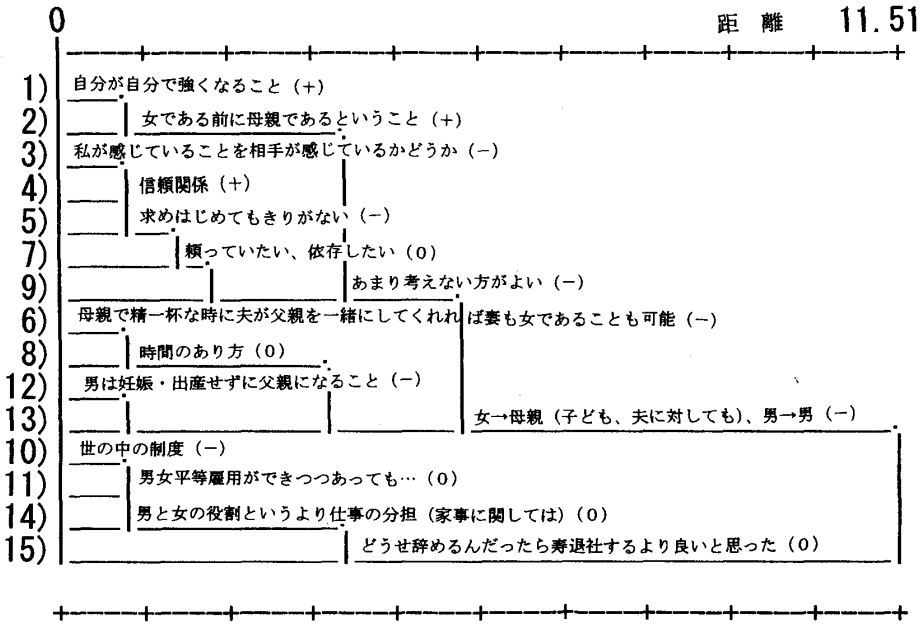

Fig. 2. 被検者Bのデンドログラム.
1) 左の数値は重要順位
2) 各項目の後ろの（ ）内の符号は単独でのイメージ

ラスが3項目であり，マイナスが7項目，0が5項目であることから，現在の役割分担にやや不満を感じるとともにいくぶんかは葛藤のあることが窺える。

被検者Bによるクラスターの解釈

クラスター1「自分が自分で強くなること」〜「女→母親（子ども，夫に対しても），男→男」：何というかなぁー。もともと自分が求めてた理想的なものをいえば，やっぱり，こう決まった相手ができるわけじゃないですか。結婚ってパートナーができるわけですよね。それが一番のメリットといえば，メリット。それから家族とかもできたりするんだろうけど，いわゆる子どもはそういう意味での付属っていったら，違うかもしれないけど（笑）。まずはそこにこう，私の場合には，パートナーができるに関してっていうのが，大きな...，うーん，それがほしかった。それってやっぱり，女の友だちとか，（元々自分が持っていた）家族とか（とは）やっぱり違うんだというのが，恋愛して初めて知った感覚ってありますよね。結婚ってこういうわけですればよいのか，思ったんですよ。するとやっぱり楽しいなぁというのが，自分を補ってくれるもの，やっぱり悲しいとかときに，こう一緒に悲しむだけじゃなくて，支えてくれたりとか，元の自分に戻してくれたりとか，私はやっぱそういうのを逆に求めてた。だから，ある意味，生活を支えてもらおうとか，自分が働かなくて済むとか思うよりは，自分のそういうところを支えてくれる人，近くにいて何でもいえる人，そういう人がほしかった。何というかなぁ，それが何ではじまるかというのは，実際，生活になってくると向こうも生活をしているわけだから，いつもいつも，それにかまけていられるわけではいられないというか...。恋愛にはある程度あっても，結婚にはあまりかなえられてないですよ。結婚に一番（↑）求めてたものが，やっぱり，実際にはそこまで含まれてなか

ったんですよ。だから，やっぱり結婚しても，のほほんと家にいられるかというと，子どもがいると責任があるし，守っていかなければいけないところもあるし，女の役割というのも付いてくるわけだから，やっぱり今までみたいに，つらいときだって，悲しいときだって，なくなるわけじゃないんじゃないですか。だけど，泣いてばっかりいられないというか，子どもができることが一番あれなんですけど。守らなきゃいけないものが，守ってもらいたかったというのがあったんだけど。やっぱり頼っていたい，依存したいという気持ちがあって結婚を望んだのがあったんだけど，子どもができたことによって，自分が頼られて依存される側に回りますよね。そのときに，やっぱり自分が親になったから，今度は主人にという移行があるんだけれど，そこである程度の，ここで出てくる，理解してくれたりとか，たとえば母役のプレッシャーを一緒に感じてくれたりとか，そこでの段階で一緒にというこうー，近さ，信頼関係が結ばれていると，やっぱり自分もここまで思わなかったかもしれないんだけど。そこがやっぱり，自分の中で満たされなかった部分で，やっぱり現状から逃げたくても，子どもから逃げるわけにもいかず，泣いて放棄するわけにもいかない。どうするかというかといったら，私はその前に母親だから，強くならなきゃいけないんだという結論に達していくわけですよ。だからまぁ，そこに至ったときに，そこに至るまでに色んな意味で相手に不満もあるし，考えていくなかで，こんなに私はこういう風に考えているのに，向こうはあまり自分の生活ベースが変わってないから，いわゆる男は男のままでいて，まぁ，特に子どもって赤ちゃんのときとかって，見てて可愛いだけですよね。積極的な人って，たとえば，おむつ変えてみたりとか，お風呂にいれてみたりとか，自分でいろいろ勉強して，赤ちゃんであっても意欲のある人はすっごく赤ちゃんというものに関わっていくんだろうけど，そうでもない人にとっては（赤ちゃんは）ほんとにサルなんですよ。だけど，サルにしたって，飼育係みたいに餌あげられたりとか，それをみて今日の気分はよさそうだとか，毎日みてないとわからないんですよね。とくに赤ちゃんは言葉がわからないから，そのときのこととかで，様子をみて今日は何かおかしいとか，そういうのを感じ取るって，やっぱ母親であって，でも父親もできないわけではないんですよ。やろうと思えばできないわけじゃないんです。できないことは産めないことだけであって，産めなくてもできることはたくさんあるなかで，そこでの関わろうと思うか思わないか，やっぱりそれが薄かったりすると，一人で育児をしているんだというのが，とくにいつも日中は子どもと一緒にいる時間が，私と比べて，（主人は）会社に行ってみんなとしゃべっているのが，しゃべらない子どもとだけの生活に放り込まれると，何かねー，一人ぼっちになったようなストレスを感じ，になるんですよ。それを同じく共有して，あなたも父親のはずなのに，共有できるはずの人があまり共有しなかったりした場合，仕事で帰ってきても子どもが寝る姿がみたいと思う姿を見るのと，たとえば，私への挨拶もそこそこでいいんで，“あ，寝ちゃったのかなぁ，起こしちゃうかなぁ”というのを見てると，何か“やめてよー”といいながら，子どもを通しての夫婦の仲がね...。ただ，うちの主人の場合はそれをしない，帰ってきてテレビをつけて目の前で，自分がリラックスできる状態を持っていくなかで，子どもは入ってないときに，私が“帰ってきて子どもの顔とかさ，見たりしないわけ？”と聞くと，“疲れているのに，そんな気にならない”と言われたときに，“誰の子？（笑），何のために私は毎日，何のために（↑）”って思ったんですよ。”誰の子を産んだの”って。そう思ったときに，この人を間に入れて考えちゃっ

たら，やっぱり，自分の意義が失われていくから，この人のために子育てをしている訳じゃなくて，彼と私の子ではあるけれども，そこの意識の中で「私の子」だし，私が私の子を産んだのが始まりだしとか（笑），やっぱりそこで気持ちの切り替えを頭に入れている。いろいろと目につくのがすごく出てきちゃうわけですよ。うーん。それをしないためにはどうするかというのが，あまり感じないようにするのがベストなんだというのが行き着くところ。いわゆる年輩のお母さん方ととかが，“いいよ”みたいなことをいうのがなぜというのがわかるような...（笑）。もちろん，今でもそんな風にいうのはいやですよ。“亭主，元気で留守がいい”というあのフレーズは，私はいやなんですよ。だったら，結婚する意味がないんですよ。私の中では。でも，自分を強くむきだしにするとやっぱ辛いんで，だからあまり考えないほうがよいと思うんですよ。あまり，感受性豊かであることも良いけれども，求め始めてもきりがないし，やっぱり自分ができることを自分でやってればいいし。相手は子どもだから，やれば返ってくるものだから，やりがいがないわけじゃない。そこでやっぱり，向こうが都合よく“妻や女になーれ”みたいなのがあっても，やっぱり普通に洗濯したり，ご飯作ったり身の周りのことをするのが主婦だから，それってお母さんがやってきたことじゃないんですか。子どもが赤ちゃんのときは，遊び方もわからないから（主人は）あまり感じないんですよね。父性本能とかが赤ちゃんのときにはそんな出てこないんですよ。女はお乳をあげたりとかすることによって，赤ちゃんを産んだんだとか，赤ちゃんがいるなぁってすごく思うんだろうけど，お父さんってどっちかというと，子どもが大きくなってきて会話ができるようになってきて，パパをパパとして求めて来られて，やっと子どもがいる感覚が，ちょっと楽しい，あ，遊べるとか，向こうもなんかちょっと使える，なんか取ってきてとか（笑），いわゆる何というのかなぁ，やってあげる環境のときだけって使えないんですよね。ある程度使える状態じゃないと父親もやりがいがないらしくて...（笑）。そこで思ったんですよ。見返りを求めない無償の愛は父親は注げないんだって。お父さんは無償じゃな。ある程度見返りをとても求めている。お母さんはそこで，子どもに求めない分，父親に求めているわけですよね。それがやっぱり，そこまでいわなくても気持ちがわかるようになってくれれば，「たいへんなんだよね」というのはたいして思ってないんじゃないのかなぁー。

クラスター2「世の中の制度」～「どうせ辞めるんだったら，寿退社するより良いと思った」：ある程度までは，子どものために家にいたいと思ってたし。だから，何というのかなぁ，あまり女の人が働けないとか，ニュースになるようなこととかにも，そんなに気にしてなかったんですよ。あまりそんなにそうかと思うだけで，変えるべきだよと思ってなかったんですよ。そんなに関係なかったことだし，自分に当てはめてなかった...。うーん，だがやっぱり世の中には母子家庭の人とかもあるわけだから，そういう人たちがちゃんと働ける体制をとってあげたりしなきゃとか，日本が遅れているんだなぁとか，そういうときは普通に人事のように思ってた程度で，自分はそういうのに当てはまらない結婚をしようって思ってたから。だから男の人が仕事を外でちゃんとしてくれれば，家の中のこととかは私がやればいいことで，当たり前みたいに思ってて。仕事もしたいけど結婚もしたいから，結婚と仕事といったら結婚に二の足を踏む人もたくさんいるけど，私はどうせ職場もそうだったので（結婚を選ぶこと）それに対してあまり抵抗はなかった。逆に何でそんなことを思ったかというのは，やっぱり結婚して今，最近，男に頼ってはやっていけない自分が情けないと思っ

た部分があって。それがあたり前だと思ってきた30年近くを覆すぐらい，やっぱり旦那に家の中のことをやっているのが当たり前だという風に思われたりとかしたら，彼の仕事は外で認められるのに，私の仕事は誰にも認められてもらえないというのが，すごく欲求として出てくる。やっぱりお母さんの愛情は無償には子どもに与えられるけれども，そこに何かの見返りがほしいと思ったときに，認めてほしいというのが人間の中にあると思うんですよ，評価されたいというのが。それが嬉しいとか，原動力になってくるんじゃないですか。それをしてくれるのが誰かなぁというのを考えたら，身近にいるやっぱ子どもはまだそこまで大きいわけじゃないし，父親というか，旦那さんだったりとかしますね。それをやっぱりすごく当たり前のように思われてしまうと，他の第三者が認めてくれる仕事だって，結婚前はできてたのに...，それがあったのに，もちろん奥さんは旦那さんから給料がでるわけじゃないんじゃないですか。生活費なんとかで，お小遣いも強くいえないし...。もう一度認められたいって，社会から置き去りにされたような気がするんですよ。私は車の免許を持っているんで，いわゆる自分個人の身分証明書を持っているんですけど，車の免許持ってない人って，“身分証明書を見せてください”といわれると，旦那さんの名前に入っている保険証を提示するしかないんですよ。旦那さんの後ろに扶養家族として書いてるあれしかないんじゃないですか。結婚すると，何か，人格が奪われるというか，誰かの付属，また戻ったというか。うーん，親御さんからある程度抜け出て，一人で稼いだりとかして，ある程度自立ができたはずのものが，また家庭に入ることによって，また何かこう付属になってしまったというのが，満たされないことから，不満に変わったんですよね。最初は不満なんかじゃなかったのに，考えたこともなかったのに，それが思ってたことですよね。でも，実際“私働ける？”と思ったらと働けないんだって。そのときに世の中に目を回してみて，絶対に前みたいに働けないし，仕事もないし，子どももいるし，周りの目とかも子どももいるのにとかそういうのも出てくるし。何か...。年齢もあるし，スキルというのもあるし...。もう取り戻せないというか。今私が25（歳）だったら“もう一度”ってできるかもしれないけど，それは私の頑張りとはどうやっても年齢は...，年齢詐称しかできないんですよ（笑）。口惜しいと思うんですね。ほんのお小遣い程度稼ぐというのであれば，女も仕事ができると思うんだけど，いわゆる自分が稼いで柱になれるかって思ったら，いきなり天井が...，どんなに頑張っても...，子ども２人抱えてできるかなぁ，壁がある。単に家にいて，子育てをしている時間を置き換えて外に働きにでて，例えば10万稼ぐために10万そっくり保育園に払っているんですよ。母子家庭とかだったら，安いところに入れてもらえるかもしれないけど，そのお母さんの稼ぎってなんの稼ぎにもなってないんですね。逆に，子どもを預けてもらっている分，マイナスが出ちゃうの。何のためにって思うんじゃないですか。自分が稼いだお金が，自分のお金が欲しいけど...。

クラスター１とクラスター２の比較：（クラスター１）これはでも，自分のことなんですよね。子どもが生まれる前と比べれば，自分が結婚して子どもとかできて，うーん，その過程の中で自分が思ったり，感じたこと。（クラスター２）もう一つのほうは，まぁ，自分が思ってたりしたこともあるけども，それは前から思ってたとか。今に始まったというよりは，前から自分が育った環境のなかで思ってたこと。だから，結婚前と比べると理想と違ってたとかね。こんなはずじゃなかったのにとかもけっこうあるからね，どっちかというと。やっ

ば理想と実際の間にはギャップが，それをやっぱり現実化するには努力というのが間に入ってくるんだなぁーっていうか。

全体のイメージについて：これだけみていると結婚しないほうがいいと思われるんじゃないですか？　たぶん，結婚という現実を知っている人がみたら，そんなに幸せじゃないんですねって読み取れますね。(Q：他にはありませんか？）子どもを背負った女がどういう風にいきていけるか，男にはわからないですよね。デリケートなところはわからないんですよね。社会はそんな簡単に変わらないって（↑)。

補足質問

「時間のあり方」：一番思ったのは，結婚は時間が自由になるんですよ。たとえば，主人がいてもご主人の理解とかがあれば，中には厳しい人もいるけど。束縛があまりなければ自由になれる時間が増えてくるんですよ。ご飯作ったり，お掃除したり，豪邸じゃなければけっこう時間あまるんじゃないですか，ある程度自由になるんですよ。だけど，子どもって不規則っていうか（笑)，あのー，（子どもが寝ている）この時間が休憩時間なんだけど，寝てからできることってたくさんあるんですよ。アイロン掛けとか，起きていると危ないから。遊びは子どもと関わってただけなのに時間が終わっちゃうとか，自分の時間がない，うーん，赤ちゃんの頃とかは夜も泣くから。最近は夜はちゃんと寝てくれているから嬉しい。でも，昼間時間がないから夜時間が空くからじゃ，仕事に行こうかって思ったからってできない。主人のいる時間に仕事にいければナイスだけど，朝早いし，夜も帰ってくるのが12時すぎるし，土日も出勤が多いし...。

被検者Ｂについての総合的解釈

クラスター１：誰かに「頼っていたい，依存したい」根強い依存欲求から結婚を望んだものの，父親になった夫は「女→母親（子供，夫に対しても)，男→男」が示すように，子どもの父親としての自覚や子育てのプレッシャーへの共感がなく，「母親で精一杯な時に夫が父親を一緒にしてくれれば妻も女であることも可能」「私が感じていることを相手が感じているかどうか」と，「信頼関係」に不信感が生じる。このような夫の姿に被検者Ｂは，結婚前に描いていた理想と現実とのズレを感じているといえよう。そこで，見返りのない無償の愛を注げないのは，「男は妊娠・出産せずに父親になること」にその違いがあると生物学的要因に原因を帰属させ，子どもから得られない見返りを夫に「求めはじめてもきりがない」，「あまり考えない方が良い」と自ら諦めてしまう。このことは被検者が一番望んでいた「頼っていたい，依存したい」の単独イメージが０であり，自己疎隔的になっていることからも裏付けられるであろう。頼れない夫，自分に依存する子どもたちを目の前に気持ちを切り換え，「自分が自分で強くなること」，私は頼る女ではなく「女である前に母親であるということ」の現実を直視し，肯定的に受容するようになった。そこでこのクラスターは＜夫の支援を頼れない母親としての覚悟＞と名づけることができよう。

クラスター２：「男女平等雇用ができつつあっても...」現実の「世の中の制度」は女性の就労に厳しく，「どうせ辞めるんだったら寿退社するより良いと思った」と自ら退社してしまった。夫が稼ぎ，自分は家で家事をする性役割分業は「男と女の役割というより仕事の分担（家事に関しては)」だと感じていたが，子育てのことに関しては，二人の子だから二

人で共にやっていくものだと思っていた。無償の愛とされてきた子育てへの協力を夫に期待していた。ところが，母親が子育てするのをあまりにも当たり前のように思い非協力的で妻への共感のない夫の態度に強い不満を感じ，自分も第三者の誰かに認められる仕事をしたい，満たされたい自分を意識するようになった。しかし，職を探そうとしたときに，幼い子どもがいる状態での就職がいかに難しいのか，今まで他人事のように思っていた再就職がいかにたいへんであるかの，厳しい現実を思い知らされてしまう。過去には自ら社会の性役割分業を内面化し，自ら望んで専業主婦の道を歩んできたのではあるが，厳しい現実を知ることによって，現在の役割分業を受け容れざるを得ないと感じている。つまり，このクラスターは，＜性役割分業の社会的現実＞と解釈できよう。

全体について：被検者Bは夫に対し，心理的に依存し，育児に共感し協力する信頼関係の強い絆を求めていた。結婚前から専業主婦志向が強かったので，夫婦役割に関しては，外で働く夫に対し，家事に従事をする妻役割の分担に抵抗がなく，不公平感を感じていない。しかし，親役割とりわけ子育てに関しては，夫の子どもへの関わりや情緒的協力を求めており，非協力的な夫に強い不公平感を抱いている。諸井（1994）は，家事に関しては夫の協力を断念している妻も，子育てには夫の協力を期待していることを明らかにしている。西村（2001）の調査でも同様の結果で，家事一般と子育ては家庭内役割の比較的独立した領域であった。被検者Bは，家事・子育ての評価は無償労働であり，「愛の奉仕」（瀬地山，2001）である現実に気づくようになった。社会からの評価という交換価値を求めるより，夫からの情緒的共感を見返りとして求めていたBにとって，自分の望みと夫の態度や行動とのズレという現実によって，自ら望んで選んだ専業主婦業に満たされていない自分を見いだすことになる。このような親役割遂行の不公平感は，結婚生活そのものへの不満やストレスにつながる（Barnett&Baruch, 1985）。末盛（1999）によると，夫の家事分担よりも，情緒的サポートのほうが妻の夫婦役割満足度に対する効果が大きいという。情緒的に満たされていないとの不公平感は，夫は対等なパートナーでなく，夫を身の回りの世話をすべき［大きな子ども］として，夫婦関係を擬似母子関係のように感じさせる。子どもに対しても，夫に対しても二重の母親役を強いられている（長谷川，1989）と感じさせることになる。このことは，いずれも結婚にかかわる社会的現実である，第1クラスターの「女→母親（子ども，夫に対しても），男→男」と第2クラスターの「どうせ辞めるんだったら寿退社するよりも良いと思った」が結節され，＜性役割分業の社会的現実＞が＜夫の支援を頼れない母親としての覚悟＞をもたらすことになる。事例Bは，「家事」のみを受け入れ，「子育て」については夫の協力をと感じながら，両者ともに担う諦観すべき現実に置かれている専業主婦の葛藤と意識変化のプロセスを鮮やかに描いた典型であるといえよう。

被検者Cの事例

被検者Cは41歳の在宅勤務の主婦である。短大卒後に在宅で勤務し，現在は休職中。3歳（男）の子どもと夫との3人暮らしである。クラスター分析の結果はFig.3のようになった。連想項目の中で，重要順位の高い順にほぼ1/3となる4項目を取りあげると，1）子どもの将来，2）世の中の動き，3）夫婦の会話の内容，4）夫婦お互いが感じている子育ての考え方，である。これらは子育てに関する夫婦の意見のズレを示す内容と考えられる。重要項目につ

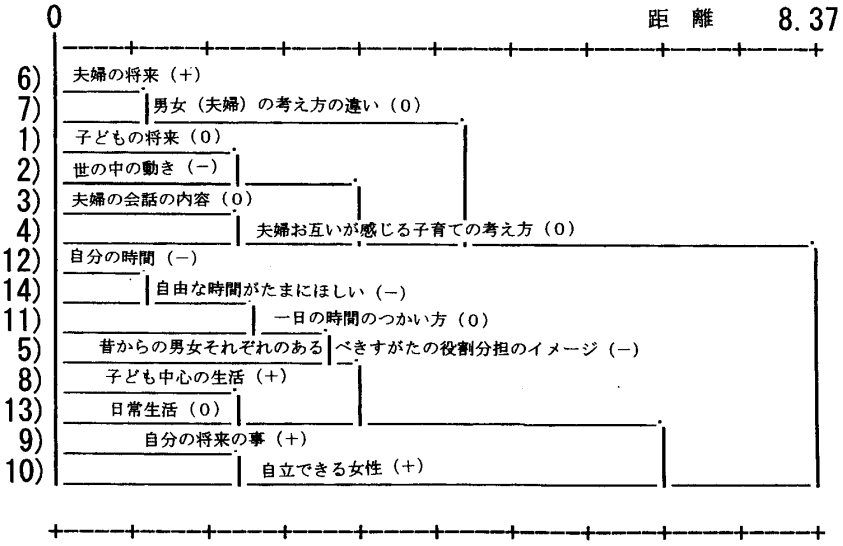

Fig. 3. 被検者Cのデンドログラム.
1) 左の数値は重要順位
2) 各項目の後ろの（ ）内の符号は単独でのイメージ

いては0が3項目，マイナスが1項目であり，全14項目の単独イメージをみるとプラスが4項目，マイナスが4項目，0が6項目であることから，全体としてはいくぶんか葛藤があるものの，重要項目と全項目のいずれも現在の役割意識について自己疎隔的であることが窺える。

被検者Cによるクラスターの解釈

クラスター1は「夫婦の将来」〜「夫婦お互いが感じる子育ての考え方」：うーん，意識とか……，家族の考え方とかなぁ。夫婦それぞれが感じる家族の考え方とか，家庭のあり方とか。具体的に主人が考えることと私が考えることと，たぶん，共通の部分もあるけども，それぞれ考え方は違うところはあると思うんですよ。あまりそういうことって，よく話したことないからはっきりとこうというのは分からないんですけど，ほんとに普通の会話からこういう風に考えているんじゃないかなぁという…。たまに，たまに具体的にこうしたほうがいいとかというのは話すけど，それをなんかいつも具体的にこれはこうだとか，これはこうしたほうがいいとか話している訳じゃないから，それぞれがどういう感じているってなかなか…，お互いにこういう性格だからこういう風に考えているんじゃないかとかって想像のほうが多いかもしれない。たぶん，こういう風に考えているんじゃないかという。わりと何か日本ってそうだと思うんですよ。日本の…，もっと若い人になってくるとねー，また違ってくるかもしれないですけど，うーん。あと，育った環境とかにもよって違ってくると思うんですけど。だから，子どもの育て方についてもやっぱり私が育った環境と，主人が育った環境というのは違うから，やっぱり私が親にしてもらったことを自然と子どもにしている，主人は主人で自分が育ってきたことをそのままという感じだと思うんですよ。私はそれプラスいろんなテレビとか本とかの情報で，自分が親に育ててもらった環境とか考え方プラスいろんな情報をまた取り入れているから，子育てに関しては。だからそれが必ずしも主人

と私の考え方が合っているわけじゃないんですよ。（Q：他にはありませんか？）世の中の動きとかは何かニュースとかを観てそれで会話することは（笑），こういうことがあるんだとか，それについて多少は話す程度。あとは具体的に...，会話をしないわけではないけども，やっぱり話の中身は子どものこととか，子どもに関係ある何か世の中のこととか。何かニュースとかを観てこういうことがあったとなると，何か気をつけなきゃねみたいなぁ。小学校の週休2日制だったりとか，学校のこととかになると何か，まだ早いんだけど，たまに，理想はこういうねーとかっていう感じ。だから時間があればけっこうしゃべるかもしれないけど，帰りが遅かったり，土日はたまに遊びにつれてきてくれたりするけれども，主人がゴルフが好きなんで，ゴルフに行ったりとかするんで，そういうのがけっこうあるから，私にしてみれば自分ばかりみたいなぁ（笑）。私はゴルフとかしないから，趣味とかも全然違うんで...。

クラスター2は「自分の時間」～「日常生活」：仕事をしているといってもほとんど専業主婦の状態だから，日ごろは時間がたっぷりあると思っているんですよ，主人は。見えないから，時間がたっぷりとは言いませんが，時間があると思っていると思うんですよ，そんなのは言わないですから。でもやっぱり，主婦ってきりがないんじゃないですか。だから，その中で自分の時間がたまにあればいいかなぁとか思うんですよ。やっぱり子どもが中心だから。子どもに合わせて，子どもの生活リズムに合わせて，たぶん，結婚する前とか子どもがいないときとかだったら，自分で出かけたいときに出かけるっていうのができたんですけど，（今は）子どもにも合わせないといけないし，私自身が出かけたくないと思っても，子どもを遊びにつれていかなきゃいけなかったたりとか，家ばかりいてもだめだからとか。うーん。あとは，もっと若い人とか地域性とかにもよるんでしょうけど，やっぱり男の人は外で仕事をして，女は家でというのがやっぱり多かれ少なかれ，まだ日本の中に残っているから。それぞれの家庭でもやっぱり地域によっても違うとは思うんですけど。これはまだ多少は残っているのかなぁ，全体的にみると。時間はうまく使えれば使えるんだろうけど，時間通りにいかない。

クラスター3は「自分の将来のこと」と「自立できる女性」：結婚して，年齢はいってても，たぶんあのー人生は長いから，一応平均寿命で考えると80（歳）位だとすると，将来ってどうなるかわからないから，やっぱり自立できるようなことを考えてたほうがいいんじゃないかっていうことと，あと，何か私ずっとやりたいことがあって，状況がいい状況ではないけども，やっぱり一つ目標があるのと，結婚してから最近またやりたいことを見つけたので。うーん，目標は一応できているけども，それが実現できる状況じゃないんだよね，今は。時間とか，環境とかが。でも，それがこういうことを常に考えてきたんで，それは結婚してもする前と変わらないことかなぁ。ずっと自分がやり続られる仕事をずっとー探してて，結婚する前にずっと続けられる仕事っていうのは見つけられたんだけども，結婚してまたいろんな情報を得ることができて，そこからまた新たなのが見つかった，うーん。元々なにしろ結婚しようという願望がまったくなかったので，したいとかもまったくなかったので。（子どもが）幼稚園に入ったらそろそろ準備をしようかなぁって。でも，子どもがいるときといないときでやっぱり状況が違うから，どうしても仕事をする中でも，子ども優先のような考え方になってしまっているかもしれない。今まで子どもいないときに思ったことと，ずっと

仕事をしようって思ってたのが，やっぱり子どもがいると子ども中心に考えなきゃいけないなぁっていう風には変わっているかなぁ。

クラスター１とクラスター２の比較：上（クラスター１）はまったく自分とかけ離れてはいないけど，自分というよりも子どもとか主人のことを前提にという考え方というのが頭にあっての内容です。この中には（クラスター２）主人は入ってないんですよ。主人が協力してくれたらいいんだけど...，それは願望として，自分の願望かなぁって。

クラスター１とクラスター３の比較：そうですね。一番下（クラスター３）は自分だけのことですね（笑）。

クラスター２とクラスター３の比較：自分のことなんだけども，関係はしているけども，一番下の（クラスター３）は二の次。条件付きみたいな感じ。今はそういうことは頭の中にはあるけれども，こういうことはちょっと置いとかないといけないぞっという内容。

全体のイメージについて：やっぱり，子どもと主人が一番で，先に考えなきゃいけないことで，自分のことは一番最後になるのかなぁー。結婚する前だったら自分のことだけ考えたのでよかったのに，やっぱり家庭をと思うとそういうことは言ってられない。逆に私の母とかはたまに遊びにくると，この状況って自分もそうやってきた状況なのに，年取ってくると，それ（子育て）を卒業すると，たぶん忘れていると思うんですよ。だから遊びにくると，私も結婚が遅かったもんですから，けっこう母とあっちこっち行ったりとか買い物とかしているんですよ。そのイメージが母の中ではずっとあって，私からしたら家庭が中心なんだけど，母からすれば自分がそういうことが終わっているんで...ちょっと耐えられないみたいなんですよ。最近私も気がついたんですけど。子どもがいても，私と会っているときは忘れている。逆にいうと，自分がそういう風に，家の母は仕事をしてたから，仕事をしながら子育てもしてて，母親はすごいなぁと思うことはよくあるんですけど，それをやってたんだけど，もう年取ってしまうと，私の置かれている立場をすっかり忘れてしまっているみたいで，意識としては完全に忘れているようです。それが逆に面白いなぁって。そういう葛藤があるのかぁーって。だから，また独身の時は自分ひとりで，家庭を持つとやっぱり旦那さんとか子どものことになるんだけども，年取ってくるとやっぱり自分のことだけになるのかなぁーって（笑）。...最近熟年離婚とかあるんじゃないですか。そういうのはやっぱりよくわかるって。それってやっぱりお互いに自分のことを考えているからだと思うんですよ。

補足質問

「夫婦の将来」：あまり話したことないんですから，まったくわからないんです（笑）。まぁこうあればいいなぁとか...，その辺もあまり考えたこともないんです。だから夫婦が将来一緒に何かしたいとか，そういうんじゃなくて，やっぱり...，自分の仕事をもっと確立したいという思いが強いから，２人でどうのこうのというよりは，主人がどう考えているか，その辺全然わからないんですけど。私はもうただ...，別に趣味とかが合うわけじゃないから，お互い好きなことを...。たまにどこか行ったりする程度で，何か夫婦一緒になんかやりたいとかはないんですね。けっこうあの，定年してからとか，何か夫婦で一緒に何かやるとかするんじゃないですか。そういう意識はまったくないんです。

被検者Cについての総合的解釈

クラスター1：子どもが生まれてからの「夫婦の会話の内容」は主に「子どもの将来」，子育てと関連した「世の中の動き」などに関するものに変わった。しかし，子育てや「夫婦の将来」に関して，「男女（夫婦）の考え方の違い」について具体的に話し合い調整するわけではない。子どもには，夫婦のそれぞれが自分の体験に基づいた考えで関わっている。第1クラスターの6項目のうち4項目が感情喚起のない0であることが示唆するように，夫婦の将来や子育てについて夫と考え方の調整をすることから自分を解離し，距離を置いて眺めていると解釈できよう。よってクラスター1は，＜夫婦の表面的会話とそれぞれの考え方＞と名づけることができよう。

クラスター2：「日常生活」のすべてが子ども優先であり，「自分の時間」「自由な時間がたまにはほしい」と感じながらも，「一日の時間のつかい方」は唯一のプラス項目である「子ども中心の生活」になっている。夫に協力して欲しいとの願望はあるがかなえられず，「昔からの男女それぞれのあるべきすがたの役割分担のイメージ」として受け入れている。そこで，クラスター2は＜子ども中心の日常＞と命名できよう。

クラスター3：被検者Cは，自身の母親と同じように結婚後も仕事を持つことを考えてきた。働きながらの子育てを終えた自身の母親の現在の生活を見るにつけても「自分の将来の事」を考え，現在は子育てで優先で休職中だが，子育てが一段落してからやりたい仕事をみつけており，「自立できる女性」でありたいと感じている。プラスの2項目からなるクラスター3は＜将来の自立＞と解釈できよう。

全体について：被検者Cと夫とのコミュニケーションは，子どもが生まれてからは子育てに関するものがメインではあるが，その考え方にはズレがあると感じ取っている。夫婦間の話し合いと夫婦関係満足感を調べた門野（1995）の調査によると，「暗黙の了解」より「話し合いによる合意」が満足度を高める結果となっている。被検者夫婦が子育てに関しても「暗黙の了解」が多いのは，「元々なにしろ結婚しようという願望が全くなかったので，したいとかもまったくなかったので」という結婚観により夫婦関係の満足感を強く求めないことによる逆方向の影響も考えられる。また被検者Cは，職業を持ち自立を志向しながらも，一番重要なのは重要項目第1位の「子どもの将来」のことであり，子育てを優先せざるを得ないと感じている。現実に子育てを主に担っている母親にとって，現状からすれば，個人として自分の領域や時間を求めることはあくまでも願望にすぎないかもしれない（永久・柏木，2001）。しかし反面では，各子育て期の段階は，子育てが一段落したあとの将来展望や計画を意識化させる可能性を持つことを，事例Cは示唆している。クラスター1の「夫婦お互いが感じる子育ての考え方」および，クラスター2の「日常生活」と結節し，全体構造の中心項目となるのがクラスター3の「自立できる女性」であることが象徴するように，被検者Cにとっては，＜夫婦の表面的会話とそれぞれの考え方＞を感じつつ，＜子ども中心の日常＞を送っているが，それらを支えるのが＜将来の自立＞という目標であると解釈できよう。

総合的考察

既婚女性の性役割意識は，家族成員との日常生活の中でのダイナミックな相互作用によっ

て形成・変容され，意味づけられる。このダイナミックな形成・変容過程と対象者自身によるその意味づけに迫るには，通常は意識化されることのない内面深くのイメージ構造に現象学的に接近することが求められる。このため本研究では，被検者それぞれの性役割意識に関する連想項目を，項目の類似度により多変量解析し，その構造を被検者自身に解釈させ，了解的に分析していくPAC分析を用いた。そして，家族発達段階の第1段階の新婚期から第2段階の出産・育児期に移行している既婚女性（専業主婦3名）の性役割意識が，どのような要因やメカニズムによって形成され，変容してきたのかのプロセスを分析してきた。そこで本項では，まず3つの事例分析により得られた結果と考察を振り返りながら，総合的に考察したい。

＜事例A＞

被検者Aは，子育ての責任が母親に偏在し，働きにくく夫の稼ぎに頼る実態から感じる，＜社会的仕組みが生み出す母親役割と制約＞への不満を，＜母親役割の自覚と夫の支え＞といった家庭の中での役割遂行による心理的報酬を得ることで解消している。伝統的役割の受容と遂行の見返りを，女性にしか感じられない愛情の感受と認知し，現在の役割分担の状況を肯定的に捉えている。

＜事例B＞

被検者Bは，専業主婦志向が強かったことから「寿退社」する前に自ら会社を辞め，積極的に結婚や子育てに臨んだ。ところが，期待していた夫の子育てに関する共感は得られず，疎外や葛藤に陥ってしまう。再び社会に出ようとしたときに，＜性役割分業の社会的現実＞を実感し，＜夫の支援を頼れない母親としての覚悟＞に至り，現在の役割分業の状況を諦観すべき事実として受け止めている。

＜事例C＞

最後の被検者Cは元々結婚に対する願望がなく，そういった結婚観から＜夫婦の表面的会話とそれぞれの考え方＞の違いに対して，距離を置いて眺めている。結婚前から職業を持ち自立する女性を目指しているが，今は＜子ども中心＞の日常を優先し，＜将来の自立＞は子育てが一段落してからと考えている。

以上の3つの事例から，子どもが生まれてからの家庭内の役割について検討すると，それぞれの事例の共通性と特有性は次のように解釈できよう。まず，共通性に関しては，どの事例においても，夫婦二人だけの関係に親子関係が加わった段階であることから，母親役割に関するクラスターが出現している。さらに重要度第1位の項目が，被検者Aでは「責任感」，被検者Bでは「自分が自分で強くなること」，被検者Cでは「子どもの将来」であることが示唆するように，親子関係が夫婦関係に優先する。日本社会においては，母親役割が妻役割よりも大きいことを象徴している（瀬地山，2001）といえよう。欧米的な夫婦関係観では，子どもが生まれることで，夫婦の間の親密性・コミュニケーションの阻害といった，夫婦関係の質が低下することを重大視する（Belsky & Kelley，1994）。しかし，日本ではとくに被

検者Bの事例から窺えるように「子はかすがい」という意識（関戸・藤原，2001）があり，夫婦の仲が「子どもの父親と母親」として強化される側面を持つと考えられる。ところが本研究では，いずれの事例においても，母親役割が強く受容されるのに比べ，父親役割の深い受容を示す内容が見られない。松田・鈴木（2002）によると，夫の育児参加を規定する要因は育児の必要性と時間的余裕だという。子どもの年齢が低く，子どもが父親の働きかけを要求していると認知しにくいことも考えられる。被検者たちが専業主婦として家事は役割の分担と受け入れていても，子育ては父母ともにという意識を抱いているのに対し，育児の必要性をあまり感じない夫との間に，子育てに関する期待のズレが窺える。

また，被検者たちは，現在は専業主婦であっても，就業をまったく望んでいないわけではない。就業を望んでも，実際に働きに出ようとすると社会の様々な壁を実感せざるを得ない状況にある。東京都生活文化局のパートタイマに関する調査（1999）によると，女性が以前の勤務先を辞めた第1の理由は，「家事・育児専念」であった。再びパートタイマとして再就職できたとしても，正規労働者の労働量がオーバーした時の「補助」に過ぎない（江原，2001）。女性の一般労働者と比較した女性パート労働者の賃金比率は，70年代から今日まで一貫して低下しているという（服部，1999）。本研究の事例からも推測できるように，子育て期の女性の就業を妨げているのは，「育児の生産性」（田中，1993）の問題であろう。子育ての生産性が高ければ，子どもを他人に預けるよりも自分で育てる方が合理的である。被検者Aの「保育園が一杯だったり，私立ならお月謝も高いし…」，被検者Bの「子どもを預けてもらっている分，マイナスが出ちゃうの」，被検者Cの「ずっと仕事をしようと思っていたのが，やっぱり子どもがいると子ども中心に考えなきゃいけないなぁ」という語りから窺えるように，女性が再び働きつづけるのは割に合わないようになっている。保育園待機児童は全国で3万人にものぼる（厚生省，2002）。「育児の生産性」の問題は，性役割分業の自主的選択を可能とするために，社会の側が改善すべき問題であろう。このような問題が解決できない限り，社会への再進出の壁は厚く，女性の専業主婦志向（岡村，1990）が根強く残るであろう。以上の共通性は従来の多標本データによる結果を裏付けるものである。PAC分析が個を描きながらも，個を越えた共通の普遍性を捉えるのにも有効であることが支持されるといえよう。

次に3事例の特有性を解釈してみよう。現在の役割分担に対し被検者Aは肯定感，被検者Bは疎隔・葛藤感，被検者Cは疎隔感を感じている。結婚前から専業主婦志向を抱いていた被検者Aと被検者Bの違いをもたらす要因は何であろうか。被検者Aは父親としての夫に「寝かせてあげたり，洋服を着替え（させ）たりとかやってみて」と道具的サポートを多少求めてはいるものの，「母親とか辞めたいって思っている」ときに夫に頼ることで，情緒的サポートや満足感を得ている。ところが，被検者Bの場合，「お母さんは子どもに求めない分，父親に求めているわけですよね。それでやっぱり，気持ちがわかるようになってくれれば…」と母親としてのストレスや大変さへの共感を強く求めているが，夫からは情緒的サポートを得ることができない。期待を裏切るこの現実は「あたり前だと思ってきた30年近くを覆すぐらい」で，結婚前から持っていた専業主婦志向そのものさえ変えてしまうほどである。しかし，社会側の現実の壁に再びぶつかったとき，現在の役割分業を受容せざるを得ない状況に置かれていることに気づく。この事例Bは，「伝統的性役割の主体的受容」→「期待と

現実とのズレ」→「伝統的性役割への反発」→「伝統的性役割の諦観的受容」の変化のプロセスを描き出している。被検者Aと被検者Bの特有性の比較により，夫からの子育てに対する情緒的サポートは極めて重要（難波，1999）であり，相互補完的・促進的である子育て期の女性の妻役割・母親役割（金，2002）といった性役割意識に大きな影響を及ぼす決定因であることが明示されたといえよう。そして，結婚願望がまったくなかったという被検者Cは，自身の女性としての自立を志向しつつも，夫との子育てに関する考え方のズレを確認することもなく，子育て優先の現状に自己疎隔的になっている。この事例Cからは，個々人が抱いている結婚観が，夫との関係のあり方を規定し，性役割分業の現状を解離的に（心理的に距離を置いて）受け入れさせていることが読みとれる。それぞれ同じく専業主婦であっても，現在の役割に対する受容のプロセスやメカニズムは異なっており，PAC分析を通してその個別性が鮮やかに浮き彫り出されているといえよう。

以上のように，性役割意識の変化について一つひとつの事例をとりあげその全体構造を分析し比較することで，共通性や個々人の葛藤や疎隔の原因が明らかにされてきた。このような事例記述的分析法は，カウンセリングなどの支援実践にもきわめて有効であるといえよう。なお，本研究では専業主婦のみを対象としており，さらに有職の既婚女性における性役割意識についても検討していくことが必要であろう。

引用文献

Barnett, R.C. & Baruch, G.K. Women's involvement in multiple roles and psychological distress. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 1985, 135-145

ベルスキーJ.・ケリーJ. 安次嶺佳子訳 子供をもつと夫婦に何が起こるか 1995 草思社（Belsky, J, & Kelly, J. *The Transition to Parenthood*. 1994 Delacorte Press.）

Bonnie, F. The formative years: How parenthood creats gender. *The Canadian Review of Sociology and Anthropology*, 38(4), 2001, 373-390

江原由美子 ジェンダー秩序 2001 剄草書房

長谷川公一 政治社会とジェンダー 江原由美子・長谷川公一・山田昌弘・天木志保美・安川一・伊藤るり（編著） ジェンダーの社会学：女たち男たちの世界 1989 新曜社 pp.55-94

服部良子 労働力としての質・量ともに向上 井上輝子・江原由美子（編）女性のデータブック第三版：性・からだから政治参加まで 1999 有斐閣 pp.81-114

稲毛教子 固定的性別役割分担意識の分析 東京国際大学論叢 人間社会科学部編，2，1996，161-175

伊藤裕子 成人の性役割観が性役割選択に及ぼす影響 心理学研究，71(1)，2000，57-63

門野里栄子 夫婦間の話し合いと夫婦関係満足度 家族社会学研究，7，1995，57-61

金 娟鏡 子育て期の女性のアイデンティティ様相―母親役割・妻役割との関連からの日韓比較― 日本発達心理学会第13回大会発表論文集，2002，90

厚生労働省発表資料 保育所の現状等について 2002

松田茂樹・鈴木征男 夫婦の労働時間と家事時間の関係―社会生活基本調査の個票データを用いた夫婦の家事時間の規定要因分析― 家族社会学研究，13(2)，2002，73-84

諸井克英 子育てにおける衡平性の知覚 家族心理学研究，10(1)，1994，15-30

永久ひさ子・柏木恵子 中年期の母親における「個人としての生き方」への態度 発達研究，16，2001，69-85
内藤哲雄 個人別態度構造の分析について 信州大学人文学部人文科学論集，27，1993，43-69
内藤哲雄 個人別態度構造に関する研究 平成6年度科学研究費補助金研究成果報告書 1995
内藤哲雄 PAC分析実施法入門：「個」を科学する新技法への招待 1997 ナカニシヤ出版
内藤哲雄 PAC分析実施法入門：「個」を科学する新技法への招待（改訂版） 2002 ナカニシヤ出版
難波茂美 産褥期の母親が感じているサポート・葛藤の特徴とストレス反応との関連 岡山県立大学保健福祉学部紀要，6(1)，1999，1-8
西村純子 性別分業意識の多元性とその規定要因 年報社会学論集，14，2001，139-150
岡本哲雄 家族のライフ・コースと発達段階 岡本哲雄（編）家族心理学入門 1992 培風館 pp.85-107
岡村清子 主婦の就労と性役割分業―女性の職場進出は家族の役割構造を変えるか― 家族社会学，2，1990，24-35
笹田哲夫 社会が動く家族が変わる：少子・高齢社会をどう生きる 2001 桐書房
関戸洋子・藤原照久 現代家族と性役割分業意識 名古屋自由学院短期大学研究紀要，33，2001，29-44
関井友子・斧出節子・松田智子・山根真理 働く母親の性役割分業観と育児支援ネットワーク 家族社会学研究，3，1991，72-84
瀬地山角 東アジアの家父長制―ジェンダーの比較社会学― 2001 剄草書房
Steinar, K. *InterViews : An Introduction to Qualitative Research Interviewing*. 1996 SAGE Publications.
末盛 慶 夫の家事遂行および情緒的サポートと妻の夫婦関係満足度―妻の性別役割意識による交互作用― 家族社会学研究，11，1999，71-82
鈴木淳子 高学歴夫婦における性役割態度の関係―就労とのかかわりに関する社会心理学的考察―理論と方法，14(1)，1999，35-50
田中重人 高学歴化と性別分業―女性のフルタイム継続就業に対する学校教育の効果― 社会学評論，48(2)，1993，130-142
東京都生活文化局 東京都男女平等参画白書99 1999
やまだようこ 人生を物語ることの意味―ライフストーリの心理学― やまだようこ（編著）人生を物語る―生成のライフストーリー― 2001 ミネルヴァ書房 pp.1-38
山口一男 既婚女性の性別役割意識と社会階層：日本と米国の共通性と異質性について 社会学評論，50(2)，1995，231-252
大和礼子 性役割分業意識の二つの次元―「性による役割振り分け」と「愛による再生産役割」― ソシオロジ，40(1)，1995，109-126